

「カロリング期の記憶」

On memories of the Carolingian age

コーディネーター：菊地重仁（青山学院大学）

菊地重仁（青山学院大学）

題目：趣旨説明：

英題：Introductory remarks

今から 1250 年前の 768 年、カロリング朝フランク王国初代国王であるピピンが死去し、その息子たち、カールとカールマンが後継国王として即位した。後に「大帝」とあだ名されるカール（シャルルマーニュ）の功績、同王朝の歴史における象徴的な重要性は死後長らく認識され続け、現代においても戴冠、死去、列聖などの記念年には常にも増して彼に関する展示が企画され、研究書や一般書が公にされている。この長い期間、カールについての「記憶」は、歴史的事実に基づきつつも増幅や改変を伴いながら中世以降の人々のカールに関するイメージをその都度形作っていたのであり、こうした観点からの研究は蓄積されている。

さて本シンポジウムが検討の俎上にあげたいのはこうしたカールの記憶／シャルルマーニュの思い出に止まらない。確かに、シンポジウムタイトルの一部となっている「カロリング」という形容辞そのものが、「カールの家門」、さらには「カールたち」といった表現から派生したことはよく知られている。では、カールの死後に生きた人々は、現在この名を冠して呼ばれる家門がフランク王国を統治した時代をどのように記憶していたのだろうか。例えばカペー家や諸侯家門が「カロリング家」あるいはカールとの血縁を求め、あるいはそれを吹聴するなどしたとき、そのつながりに政治的な価値を認めていたこと、すなわち自らの世代を先行する時代との連続性のうちに見ていた様子がうかがえる。では、そうした政治的局面を離れたところではどうだろうか。我々中世学者がカロリング期と認識している時代に生じた様々な出来事・現象、あるいはこの時代に成立したもの、生み出されたものと見做し、その後の継承・変容・断絶などの諸相のうちを観察している諸現象——制度、慣行、技術、知など——を、カロリング期に近接する時期、あるいはそこか

ら次第に時間的に隔たりを大きくしていく長い中世期に生きた人々が一体どのように捉えていたのだろうか。

以上のような問題関心から出発しつつ、中世人たちの視点からカロリング期を捉え直してみるべく、今回は4人の方々に報告をお願いした。こうした試みが、古代から中世への移行あるいは中世の始まりの時期と見做されているカロリング期という時代そのものの歴史的な位置付けを、通例とは異なった角度から再考するきっかけとなればと願う。

菊地重仁（青山学院大学）

題目：記録を残し記憶が残る：

カロリング期の史料と中世におけるカロリング期にまつわる過去の想起

英題：From written records to memories: Sources from the Carolingian age and medieval images of the Carolingian past

要旨：現在我々がカロリング期に関わる様々な史資料を用いて歴史的研究を行うのと同様に、中世の人々がカロリング期の人々や出来事について知ろうとする際にも、文字を介して、あるいは口伝で、あるいは物理的なモニュメントとして残され伝えられてきた過去の情報・記憶に依拠していた。こうした当たり前のことを、以下の3つの観点を中心に問い直してみようというのが本報告である。

まず問われるのは、カロリング期の人々がいかなる記憶を後世に残そうとしたのか、という点である。彼ら自身、自らの現在を描き出すのに様々な過去を用いていたことが近年の研究で示されているが、彼ら自身はどのような記憶が保持されることを望んだと考えられるだろうか。

次に検討したいのはポスト・カロリング期以降の人々によるカロリング期の記憶の受容の問題である。人々は得られる情報の選別・組み合わせを経て新たな歴史／記憶を組み立てたわけであるが、12世紀に至ってはカール大帝／シャルルマーニュの遍在化、あるいは「非歴史化」とでも呼べるような事態が起こっていた事が指摘されている。考慮すべき点としては差し当たり2点を指摘しておこう。まずは10世紀初頭に9世紀の出来事を叙述したプリュムのレギノにすでにみられるように、彼らの情報源には歪みと偏り、あるいは偶然性に左右されるような要素があったという点である。次に無視と無知と忘却は区別されなくてはならないという点である。もうひとつが、例えばカロリング期の歴史叙述史料が、単独ではなくいくつかのテキストの組み合わせ（しかもいくつか典型的な組み合わせの型がある）で手稿本にまとめられ伝来しているというような、史料伝来の問題である。こうした要因は、受容された記憶の維持または変容—ただし「正しい」記憶と「誤った」記憶、「歪められた」記憶などを峻別することは難しいが—にどのような影響を持ち得たのだろうか。

最後は先に挙げた受容の問題とも絡む需要の問題、つまり、ポスト・カロリング期以降の人々によってカロリング期の記憶がいかに利用されたのかを考察したい。ここでの主要な論点は以下になるだろう。まずはモデルの継承と拒絶（が意味するもの）への注目である。例えばカロリング王家の記憶の場合、連続性に基づく政治的正統性の主張に関連して引き合いに出される場合もあれば、オットー朝期の歴史叙述において、カール大帝が偉大な君主として言及されることは稀であった—これは9世紀ないし12世紀の歴史叙述とは対照的な状況とされる—ように、カロリング期という過去を引き合いに出さない事が戦略にもなり得た。また国王文書に関しては、カール大帝期に練り上げられたモデルがその後も文書形態のベースとして継承されつつも、やはり12世紀に至るまでにレイアウトや個々の要素に変更が加えられていく様子が観察されている。こうした中、エインハルドゥス『カール大帝伝』のようなカロリング朝君主の伝記は10～12世紀の間も写本が作成され、広く読まれたとされる。知識としての過去への関心およびその記憶の伝達と、過去の記憶のアクティブな利用とは区別されねばならないだろう。

以上3つのトピックを、適宜事例を紹介しつつ概観していきたい。

津田拓郎（北海道教育大学）

題目：「カール大帝の立法活動」の記憶

英題：On memories of "lawmaking" by Charlemagne

要旨：現在一般にシャルルマーニュ(カール大帝)は「多数の勅令を発布した大立法者」であるとのイメージで捉えられている。こうしたイメージをもたらしているのは、伝統的に「フランク君主の勅令」であるとみなされてきた「カピトゥラリア」である。Monumenta Germaniae Historicaの版を見ると、シャルルマーニュに帰される「カピトゥラリア」の数は、前後の君主と比べても突出して多く、まさしく「大立法者」のイメージを裏書きしているかのようである。他方で、報告者の研究により、シャルルマーニュの「カピトゥラリア」の大多数は「勅令」とみなされうるような性質のものではなく、「カピトゥラリア」の刊本の中には、政治的集会の内外で行われる様々なコミュニケーションの中で成立した極めて多様なテキスト群が含まれていることが明らかになっている。シャルルマーニュは「多数の勅令を出した大立法者」だったわけではない可能性が高いのである。事実アインハルトによる『カロルス大帝伝』には、「勅令」発布などを通じた立法活動への言及は全く見られない。

他方で、中世盛期以降のドイツ語圏において、「シャルルマーニュの立法活動」に関する記述が一定数現れてくることが知られている。例えば1150年頃レーゲンスブルクで成立した『皇帝年代記』では、シャルルマーニュの事績の中でも特に立法活動が強調されている。ザクセンシュピーゲルにおいても、ザクセン人に法を与えた人物としてシャルルマーニュが言及されている。先行研究はしばしば、こうした「立法者シャルルマーニュ」イメー

ジの基底には、彼が実際に多数の「カピトゥラリア」を発布していたという歴史的事実が存在するとの見解を示してきたが、報告者の研究を踏まえるならばこうした説明には修正が必要であると思われる。本報告では中世盛期における「シャルルマーニュの立法活動」の記憶が構築されていく過程を跡付けることを試みる。

宮内ふじ乃（立教大学）

題目：行き交うベアトゥス写本の挿絵と文字

英題：Exporting/Importing Images and Scripts in the Illustrated Beatus

要旨：終末の時を800年（スペイン歴838年）と算出したベアトゥスは、776年頃に黙示録註解書を編纂・執筆した。これが中世において特異なサイクルを形成するベアトゥス黙示録註解書、通称ベアトゥス写本（現存41冊、挿絵入り29冊）の始まりである。2007年にフランソワ・ド・サールの宣教者修道会からジュネーヴ図書館に寄贈されたプリスキアヌスの『文法学教程』の後ろに綴じ込まれた挿絵入りベアトゥス写本（ジュネーヴ写本）の発見は、それまでのステマを見直させ、失われたモデルの問題を再考するきっかけとなり、テキストと挿絵双方からここ数十年ベアトゥス写本研究を活性化させている。

イベリア半島北部で制作されたベアトゥス写本は、他のヨーロッパとは異なり10-11世紀に入っても西ゴート小文字体で筆写されているだけでなく、黙示録挿絵のほとんどが半島独特の個性的な表現を継承し続けている。その一方で半島外のヨーロッパ、主としてカロリング朝トゥール派の写本挿絵が半島北部の写本室にもたらした“新しい”テーマは、10世紀のモーガン写本や続くジローナ写本に扉絵風の全頁大の挿絵を導入させ、ベアトゥス写本全体の大膽な挿絵構成の変更にその痕跡を残した。11世紀南イタリアで制作されたジュネーヴ写本では赤字の小見出しにカロリング小文字体、本文にはベネヴェント小文字体が用いられ、ガスコニュ地方で制作されたサン・スヴェール写本は、カロリング朝小文字体によって筆写された。異国で制作されたベアトゥス写本は、当時本国では用いられることのなかった書体で筆写されているものの、挿絵においてはカロリング朝との関連を直接的に示唆するものはほとんどなく、同時代の表現様式や地域的な特徴が目立つ。半島外へと渡ったベアトゥス写本の挿絵は新たな土地で、新しい表現や色彩を吸収しながら書体とともに多様化していく。

山本成生（昭和女子大学）

題目：グレゴリオ聖歌成立の諸状況

英題：Circumstances of the Emergence of Gregorian Chant

要旨：「グレゴリオ聖歌」cantus Gregoriana とは一般的に、9-10世紀以降のカロリング朝フランク王国において成立した単旋律の聖歌集とされる。しかし、本来の事情はやや複

雑である。「歌」と訳される *cantus* は、9世紀の時点では「典礼」そのものを指すもの——礼拝におけるその重要度から——と理解されており、グレゴリオ聖歌は一定の聖歌のレパートリーのみならず、その演奏実践の伝統、セクエンティアやトロースなど新たに生まれた楽曲形式、そして当初はオルガヌムと呼ばれた多声音楽（ポリフォニー）をも包括する大きな概念であったのである。

こうした概括的な意味範疇は、典礼における音楽使用が伝統が強固なものとなり、他方で多声音楽の技法が発達する12世紀になると限定され、グレゴリオ聖歌は「定旋律」*cantus firmus* ないしは「単旋律」*cantus planus* と呼ばれるようになる。これは単独で演奏されるのみならず、多声音楽における基礎的な声部（テノール）となる。よって、中世の作曲家は、現代のように和声（ハーモニー）の観点から作曲するのではなく、「定旋律」たるグレゴリオ聖歌をまず基礎に置き、それに対する何らかのリアクションとして他の声部を加えるかたちで、多声音楽の作曲を行っていたのである。こうしたスタイルは、13世紀のモテットを先駆けして、15、16世紀までさかんに行われた。つまり、「グレゴリオ聖歌」はポリフォニー全盛期まで、中世音楽を規定していたといえるのである（ただし、定旋律はグレゴリオ聖歌に限らず、世俗歌曲の旋律が用いられることもある）。

このように中世音楽史において、カロリング期に成立したとされる「グレゴリオ聖歌」は枢要な重要度をもっている。この報告では、その成立時の諸相——特にグレゴリウス1世との関係——と盛期中世以降の影響が検討される予定である。

小川直之（亜細亜大学）

題目：武勲詩におけるシャルルマーニュのライトサイド光明面とダークサイド暗黒面

英題：On a dark side of Charlemagne in French literature in the Middle Ages

要旨：史実から3世紀の時を経て、中世盛期のフランス文学、とりわけ武勲詩と称される古伝説による叙事詩は、シャルルマーニュを主要登場人物とする作品を数多く生んだ。11世紀末に成立した『ロランの歌』を嚆矢とする、「シャルルマーニュの系列」に一括される作品群において、大帝は十字軍精神の体現者となり、キリスト教の護教者である至高の英雄として描かれることになる。これは、みずからの王朝をシャルルマーニュの血統に帰し、王朝の正当性を主張しようとしたカペー朝の思惑を反映した企画といえる。もっとも、文学の自由な想像力はひとたびひとり歩きをはじめると、もはや歴史を顧みなくなることも多い。シャルルマーニュはときにパロディー化され、滑稽な役柄を演じさせられることもある。そして、そのようなコメディアンとしての彼もまた大いに受け入れられ、長く愛された。

他方、シャルルマーニュを、正義を行わない悪しき君主として語る武勲詩も少なからずつくられた。彼による理不尽な裁きが端緒となり、本来ならば王国の枢要となりうる家臣ならびにその一族が反逆を余儀なくされる。彼らを待ち受けるのは、主君に対する望まざ

る戦いであり、絶望的な闘争の末に待ち受けるのは悲劇である。このような悲劇的武勲詩は文学的な完成度がたかく、後代まで読み継がれることになる。

また、武勲詩の伝統とは別に成立していたと思われるものに、シャルルマーニュと実妹との近親相姦を語る伝説がある。アーサー王にも同様の伝説が流布していたことを考えれば、このような禍々しい経歴といえども、英雄の底知れない人間的魅力を伝えようとする詩的想像力の所産と見なすことができる。

このように、武勲詩はアーサー王とならんでもっとも偉大な王であるシャルルマーニュについて、虚実をないまぜにしつつ、超人的な人間像を余すところなく伝えている。